

# 上京

## 史蹟と文化

美を創る

上京の史蹟④

ふれあい史蹟ウォーキング

ふれあい文化大学

上京「ふれあいまつり」

秋の茶会

上京クイズ「これはどうでしよう?」

美を創る



本家玉壽軒 高田勝介

京都市上京区今出川通大宮東入る

今出川通大宮東入るに、今も明治の菓子匠のたたずまいを残す本家・玉壽軒。慶應四年創業のこの老舗、幕末には井筒屋嘉兵衛として千本今出川上るで営み、京都所司代の上裏子屋仲間に属していた。明治以降は、玉壽軒と改名、臨清宗各本山の御用達として発展し、現在、高田勝介さんが五代目を継承している。



写真と文・中島孝迪

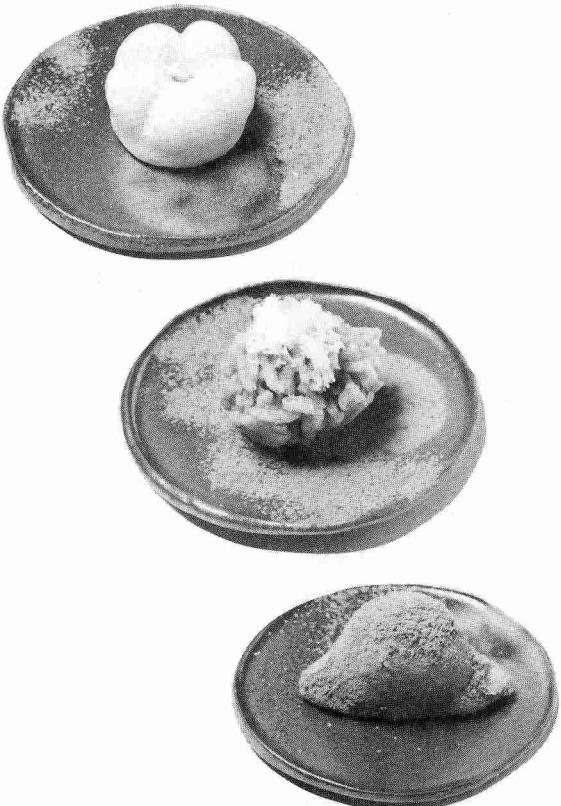
千年の歴史をもつ京都。かつて日本の政治、経済、文化の中心地であつただけに、そこには内外の文物がいち早く集まり、王城人を始め多くの人々によつてそれらが咀嚼され、洗練されて、豊かな文化を育んできた。京菓子も例外ではなく、雅びの世界から生まれ茶道の興隆にともなつて発展した。そのため、染織、絵画、文学などの影響を受け、味覚だけではなく、色や形を見、手で触れて重みや肌理を確かめ、鼻で季節を感じ、口に含んで味わい、耳でその菓子に相応しい銘を聞いて楽しんだ。このように、五感のすべてを満足

させる菓子を求めた結果、すべてが四季の移ろいと調和し、他所では見ることの出来ない芸術の域にまで昇華したのである。さらに、近江の米、丹波の小豆に代表される菓子材料の宝庫が周辺にあつた

こと、また、和三盆などの甘味料が集まつてきたと言う好条件がそなわつていたことも幸いしたであろう。

高田さんは言う「最近は、ご自分で色や形をきめ、趣向を凝らす、と言つた注文がなくなり、淋しく思っています。このような注文があると、私たちも勉強になり精がでるのですが」。確かに、京菓子は手作りの限界を越え、「夢と遊び心」を満足させるものでなくてはならないだろう。

玉壽軒には、麹を発酵させて皮に仕込んだ家伝の「高砂饅頭」があり、冬期に蒸したてのものは格別の風味である。また、大徳寺納豆の入った落雁「紫野」は、お茶菓子として有名。



# 上京の史蹟

その四



▲〈京都所司代屋敷図〉洛中洛外図屏風（寛永本）部分 一高津古文化会館蔵一

## 上京の歴史的推移

### 徳川時代（その二）

太閤秀吉没後の慶長五年（一六〇〇）、天下分け目の戦いといわれた関ヶ原の合戦によって、その霸権はおおむね徳川政権に移譲されることになりました。当時の京都は経済的に先進地域であり、同時に御所、寺社など特殊な権威を誇る地域であったため、この地を掌握す

るに徳川幕府は最も苦慮したよう

です。従って、幕府の京都支配は、都市政策のみではなく朝廷を掌握すること

に重点が置かれました。

御所および公家の掌握には、「禁中並に公家諸法度」という法令により統制する方法が採られました。これは明

らかに豊臣政権とは異なる厳しいものではありましたが、その一方では秀吉

が行つた懷柔策をも踏襲し、硬軟相交える真に巧妙な操縦法を用いたのです。しかも、これをほぼ全権委任されたのが、幕府の京都代表である所司代であつたことは明白ですし、このため派遣された初代所司代が、幕府の切れ者・板倉勝重であります。この所司代屋敷は、二条城の北側に位置していましたから、引き続き上京は権威と権力の場を提供したことになります。



▲板倉勝重・重宗屋敷跡  
—ひまわり幼稚園内—  
(堀川通竹屋町西)

慶長十年代になると、所司代は御所を中心とした公家の集住化政策を推進し、御所を中心とする大規模な公家町の造成が続けられたのです。その結果、御所も次第に拡張され、禁裏御所に加え仙洞御所、新院御所、女院御所などが造営されるようになりました。公家衆の屋敷もまた、摂家を筆頭にこの周辺へ屋敷替えが行われました。しかし、この御所を中心とした公家町の形成は、

たんに貴族を一ヵ所に集めただけではなく、その中に幕府の与力や同心衆を住ませ、禁裏御所や公家衆の動向を監視する目的があつたようです。そのため、烏丸以東、丸太町以北の一帯は、京都の中の特別な街区を形成するようになりました。

また、幕府は表面上「公武之和」を唱えておりました関係から、再三に亘り将軍の上洛を行い、天皇はじめ公家衆をしばしば供応しております。しかし、この京都と幕府との間を繋ぎ止めため献身的な努力を計つたのは東福門院（徳川和子）の存在であつたといえます。

徳川家康が、孫である徳川和子を後水尾天皇のもとへ入内させる計画は、朝廷内部に幕府の勢力を浸透させるため、彼が天皇の即位を推進した當時からあつたようですが、天皇の反発などがあり、なかなかその機会に恵まれず延引しておりました。しかし、家康没後の元和六年（一六二〇）、いよいよそのチャンスが訪れたのです。五月八日、入内のため江戸を出発した徳川和子の行列は、幕府の重臣・酒井忠世、土井利勝らにつきそれ、二十日間を費やして東海道を上り、二条城に到着いたしました。その行列の華麗さは、

言語に絶するものであつたと伝えられています。

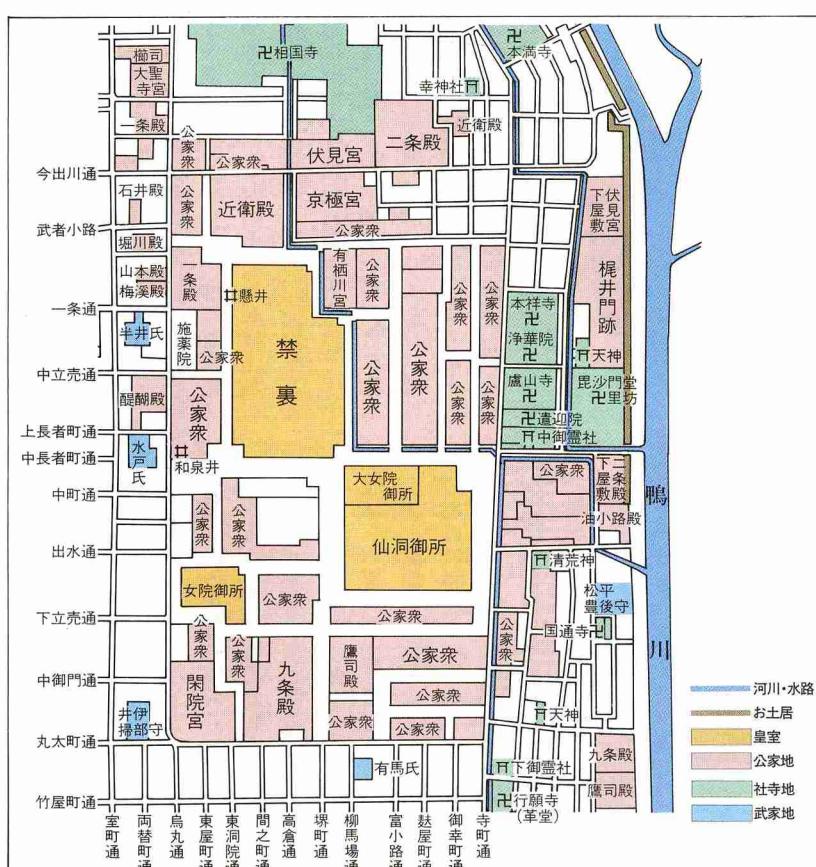
朝廷においてもその間、関白・九条忠栄や鷹司信房らに命じ、女御の宣旨についての内議を尽くし、和子を従三位に叙し、入内の日を待つばかりとなつてきました。

六月十八日、二条城を出た徳川和子の行列は北へ進み、中立売の橋を渡つて御所に向かつたのです。当時、この橋を「戻橋」と称していましたが、この日のため「万年橋」と名前を変えたと伝えられます。

「戻橋」は、宰相・三善清行が冥途から蘇ったという伝説から名付けられ、「源平盛衰記」にも一条堀川の橋と伝えられるところから、現在もそのように伝承されていますが、必ずしもその位置は一定しておりません。『山城名勝志』によりますと、「元土御門堀川橋也、今一条堀川橋を戻橋と言う」と記しています。土御門は現在の上長者町通りで、和子の通つた中立売は旧称正親町ですから、上長者町と一条との間の通りであります。しかし、少なくともこの当時はこの中立売の橋を戻橋と呼んでいたのは確かで、現在の一条戻橋に落ち着くまでには再三移動があつたようです。

さて、禁裏に到着した新女御和子の輿の周辺に集まつた女官たちの眼は、武家に対する反発から冷ややかであります。また、公武の習慣上の違いが、彼女の心を惑わしたことでしょう。しかし、こうした和子の心を慰め

たのは、ほかならぬ天皇の生母・中和院であります。彼女は、この幼い和子を影になり日向になつて庇い、優しい姑の思いやりを示したので、生来素直な心を持った和子は宮廷の生活にも馴染み、和やかな日々を過ごすようになりました。もとは家康の計画によ



る政略結婚でありましたが、和子の誠意と中和門院の賢明な指導が、天皇を中心として人間関係を築き上げ、中宮として立派に幕府と朝廷の間を繋ぎ止めたのです。和子は、入内後、一度も江戸に帰ることなく、宫廷人としての生涯を貫きます。

上京は、公武の政庁が存在したことによって、近世初頭以来、諸大名の京屋敷が数多く存在しました。とくに、徳川時代におきましては、たびたびの將軍の上洛による供奉に備える必要からと、高級品である西陣織を始めとする京都産品の買入、あるいは、金融要請によるものであつたと思われます。地域的には堀川通りより西の内野、さらには、東堀川に添つた地域に多く見られます。こうしたものが、政治の揺れ動きによつて大きく変動し、その周辺に住む人々に多大の影響を与えたことは確かです。しかし、それは政治の顔を持つていた上京の宿命であつたともいえます。

上京には、もう一つ京都を代表する大きな顔がありました。それは即ち、京都の基幹産業である西陣機業にほかなりません。

この西陣の機業地は、中世以来、京

都のみではなく全国的に日本を代表する高級織物生産地として、また、日本における最大の同業者町として、その存在が知れわたつておりました。とくに、近世には幕府の保護政策を積極的に受け、海外から輸入される原材料の生糸のほとんどを消費していたのであります。海外からの生糸が不足してくると、和糸の奨励が行わされました。これも西陣に優先的に供給されました。そればかりではなく、西陣が窮乏してきますと、数千貫の錢の貸与や、数千石の米などの貸与も行われております。

こうした保護政策は、経済的に変動の多い機業を助け、発展を促したのです。その結果、十六世紀後半に二十一町といわれていた機業地が、十七世紀末には、実に百六十余町、織機数は七千余機にまで拡大されたのです。

とくに、明暦三年（一六五七）正月、江戸を襲つた大火は、西陣織の普及に大きな役割を果たしました。大火後の衣服の需要が西陣に殺到したのです。江戸開府より五十数年、すでに平和の風潮が人々を支配し、商品流通の展開は、奢侈の風を広め、生活の水準を著しく向上させておりました。もつとも、西陣は外的要因によつてのみ発展したのではありません。機業内部において

も織物技法の改良などによる多品種の生産が行われ、これに合わせて分業体系が確立され、この技術的な発展が西陣の高級イメージをいつそう盛り上げることに役立ちました。

しかし、こうした商品経済の発展は、金糸縫や総鹿子、また、世に言う寛文小袖の大流行などの一大風潮を生み、確かに文化的繁栄を促し、光琳や友禅斎などの優れた芸術家を生み出しましましたが、その反面、幕府や諸大名に深刻な経済的困窮をもたらしました。その結果、幕府は再三に亘り美服の禁止令を出しますが、一度贅沢を味わった民衆は、「御法度は表向<sup>こはな</sup>きは守り、内証

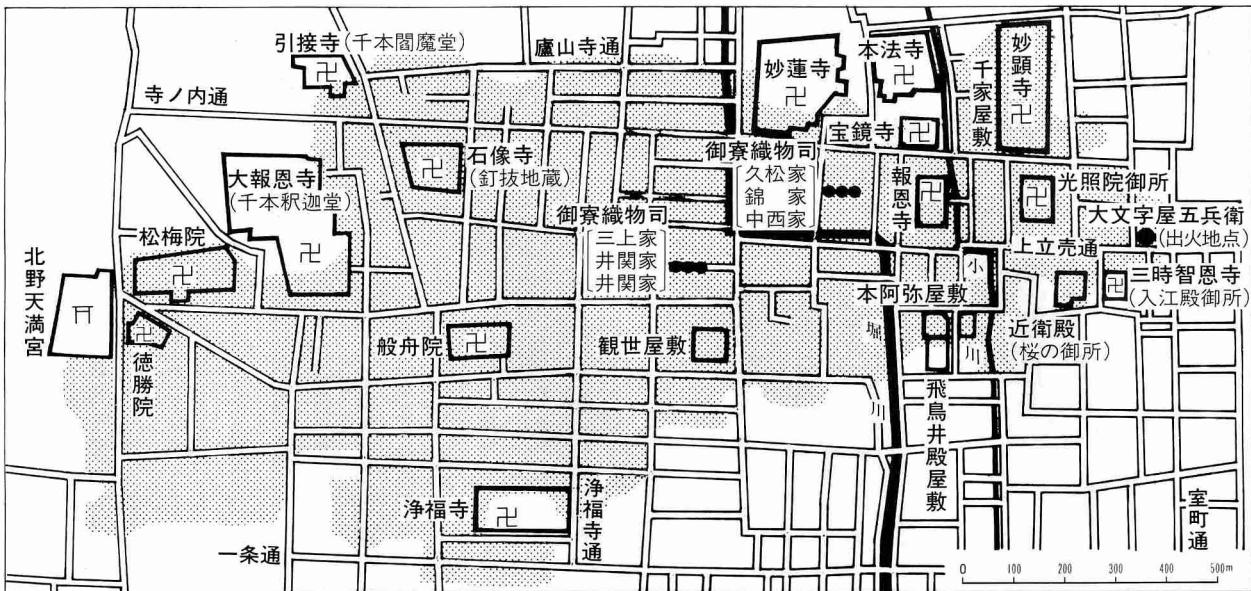
機にまで拡大されたのです。その結果、十六世紀後半に二十一町といわれていた機業地が、十七世紀末には、実に百六十余町、織機数は七千余機にまで拡大されたのです。客の出入りが一きわ激しくなった午後二時頃、台所の火が突然周囲に燃え移り、瞬くうちに家中に広

は鹿子類様々調べ」などと、有名無実になつていきました。

西陣のこうした発展に一つの影がさしてきます。享保十五年（一七三〇）六月二十日に発生した西陣の大火です。



▲寛文小袖（鐘紡株式会社蔵）



▲『西陣焼け』による罹災地図

がりました。人々はただ右往左往するばかりでありました。折からの烈風によつて火は南北両方へと燃え広がり、辺り一面火の海と化したのです。風は次第に東風に変わり、いよいよ激しさを伴つて、火は西方へと進みます。午後三時過ぎ、火が突然、一条淨福寺と北野松梅院に飛び火し、火の手は三箇所になつてしましました。それから一時間後、この三つの火は一つに繋がり、五時過ぎには西陣一帯の町々はほとんど灰燼に帰してしまつたのです。二十一日の早晩、火はようやく鎮まりました。

しかし、この大火によつて、室町通以西、北野天満宮以東、一条通以北、廬山寺通以南の西陣を中心とした上京西北部は広範囲に亘つて壊滅し、類焼町数は百三十四町に達しました。この中では、公家屋敷四、武家屋敷一、寺社六十七、民家等三千八百十軒が焼失、死者は八十人、負傷者は千数百人に達したと伝えられます。

中でも西陣機業のこおむつた被害は著しく、西陣百六十余町のうち百八町、三千数百軒が被害を受け、三千十二機の機を失い、壊滅同様であつたといわれます。もちろん三千数百軒すべてが織屋であつたわけではありませんが、

その中には、糸屋、染屋、練屋、籠屋など直接織物に関係する業種も少なくなかつたと考えられますし、機業関係者の日常必需品を供給していた人達も数多く含まれていましたから、西陣が大被害を被つたことは確かです。

もちろん、幕府としてもこれだけの大火を見過ごすことはできませんでした。公家衆にはたちに金子を送り、西陣百八ヶ町には拝借米五千俵を下げ渡しております。また、中京、下京の人々が罹災者に対する支援を行ひ、握り飯、漬物、米、錢、煙草などが配給されました。近郊の農家からも、穀物、野菜などの救援物資が次々と運び込まれたといわれております。

しかし、機業が焼失することは、そこで働く従業員たちの職もまた失うことになります。復旧に手間取れば手間取るほど、貯えのない彼等は生活に困ります。ある者は郷里に帰り、ある者は職を変え、また、ある者は地方の機業へと転身していくのです。

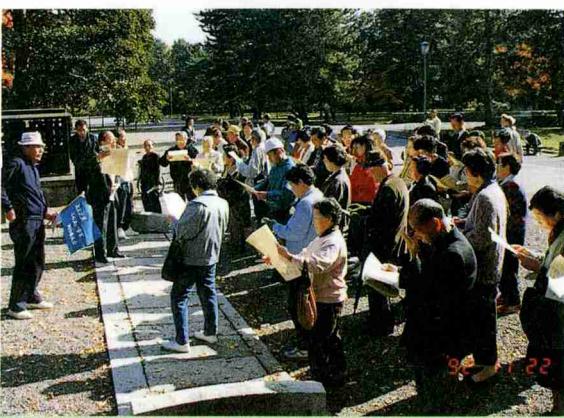
時あたかも、八代將軍・吉宗による「享保の大改革」が行われ、桐生、長浜、丹後などの地方機業の勃興が著しい時期であつただけに、この「西陣焼け」は、西陣機業の上に大きな暗雲をもたらしました。（以下次号に続く）

# 御所のまわりを歩こう

第2回

## ふれあい史蹟ウォーキング

二回目となった上京区民ふれあい史蹟ウォーキングは、十一月二十二日に「御所のまわりを歩こう」という主旨



で実施されました。この日、盧山寺、護王神社、下御靈神社という御所周辺の社寺をポイントとして、約三百人が、御所とその周辺を歩きました。

それぞれのポイントに集合した参加者は配られたガイドマップにしたがって、盧山寺から御苑の北側を歩きながら猿ヶ辻で御所の説明を聞き、祐井、近衛池の前を通り、京都御所の西側の築地塀に沿い、蛤御門から護王神社に着きます。

それぞれの出発点から歩いた他の二班も同じように歩き通し、昼頃、この催しを終了しました。

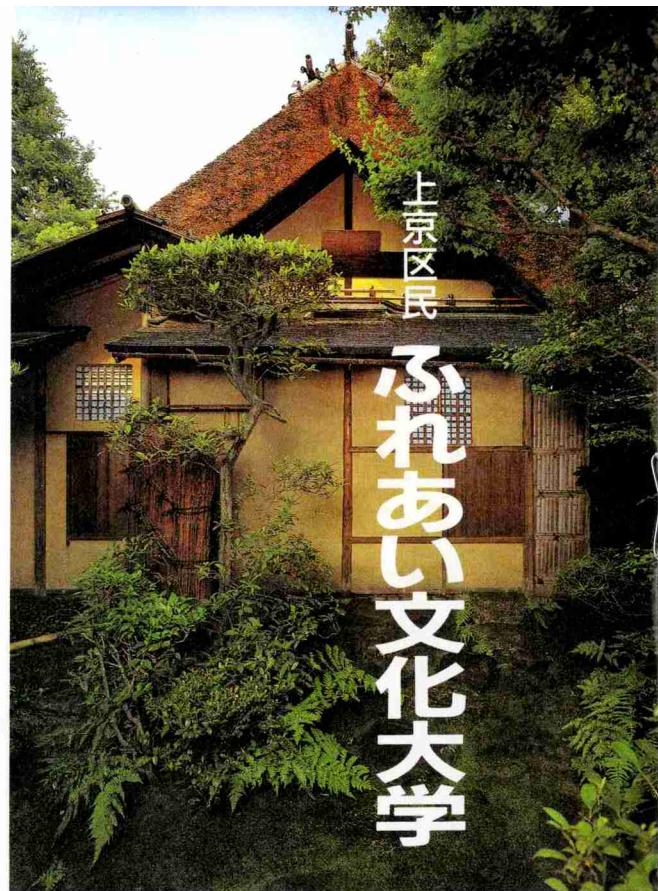
護王神社では祭神和氣清麻呂についての話を聞き、聖アグネス教会や丸丸バイラといった洋風建築を見ながら、烏丸通を南へ、石垣に沿って丸太町通を東へ、再び御苑に入り、九条池を渡り、日頃あまり通らない苑路を経て下御靈神社で最後の説明があり、寺町通を北へ、新島襄旧邸や梨木神社を経て出発点の盧山寺まで、四キロの道のりを楽しみならウオーカーしました。

護王神社では祭神和氣清麻呂についての話を聞き、聖アグネス教会や丸丸バイラといった洋風建築を見ながら、烏丸通を南へ、石垣に沿って丸太町通を東へ、再び御苑に入り、九条池を渡り、日頃あまり通らない苑路を経て下御靈神社で最後の説明があり、寺町通を北へ、新島襄旧邸や梨木神社を経て出発点の盧山寺まで、四キロの道のりを楽しみならウオーカーしました。

“お茶を知ろう”というテーマで三回にわたって開催された上京地域女性連合会の主管による「ふれあい文化大学」は、申し込み初日に五十名の定員に達するという盛況でした。

十一月九日の第一講は、春の上京区民茶会の亭主をつとめていた久田宗也宗匠の「お茶の歴史」という講演から始まりました。第二講は十一月十六日に、和菓子研究家の鈴木宗康氏による講演「お茶とお菓子」、第三講は十一月二十一日に表千家家元の拝見と呈茶という超豪華版に、参加者は上京区民ならではの感銘深い講座となりました。

以下、三回にわたる講座の一端を誌上で紹介させていただきます。



▲祖堂

## 家元拝見と呈茶

この日は、「不審庵」会議室で、久田宗也宗匠よりスライドによる「家元」の説明を拝聴しました。

小川通りに面して立つ武家屋敷風の表門を入りますと、塵ひとつなく掃き清められた石畳、手入れのゆきどいよく調和していく一瞬、タイムスリップしたかのように足が止まりました。内弟子さんの先導で、本玄関、供待、内玄関を見て露地口を潜ると、そこはもう幽玄の世界です。不審庵、残月亭、祖堂、反古張りの席、七畳の席、無一

物の席等が点在しています。露地は二重三重になっていて、外露地、中露地、内（奥）露地が設けられています。その外、外腰掛、中潛、半潛、萱門、梅軒門、内腰掛等が所を得て巧に配置されています。

祖堂は「点雪堂」ともいわれ、大徳寺竺嶺和尚の筆になる板額「点雪」が掲げられている千家では最古の建物です。右前にじり口を開けると、正面の丸窓の内側に利休居士の座像がおまつりしてあります。利休像の左脇に床があり、一段下げる四畳半の席があります。俗にいう道安団いです。この席は皆伝相伝の茶事など特別な意義のあ

る茶事にしか使われないそうです。尊厳あるたたずまいに自ら襟を正し合掌しました。

露地口で専用の草履に履き替えて、半蔀の枯流の橋を渡ると、利休時代の

お茶人さんになった気持ちで、お庭を丹念に拝見して回りました。緑の庭木や苔を痛めないように、飛石を歩き、苔むした井戸や石燈籠、手水鉢の野趣に足を止め木の間に見え隠れする柿葺屋根や萱葺門、お茶席等に見とれて、しばし時のたつのを忘れる程でした。

みどりの空気を満喫して広間のお茶室に席入りしました。内弟子さんのお手前を拝見しながら、後見の久田宗匠がした。次回もお茶に関する講座の希望が大半でした。

最後になりましたが、表千家様の心を暖まるご配慮に厚く御礼申し上げます。俗にいう道安団いです。この席味違った感じです。秋のお菓子をいた

だき、お薄を頂いて一とき、「心」のゆとりをしみじみと味わいました。

不審庵にもどり、参加者一同に会して懇談会を開きました。

\*私はこの近くに住まいする者ですが、八十歳をこえたいま、初めて千家さんの中を見せていただきこんな嬉しいことはありません。

\*来年はお茶のお道具に関することを取り上げてほしい。

\*お茶についてもぐと掘下げた勉強がしたい。

参加者のほとんどが、お茶に興味を

お持ちだったのでしょうか、たいへん喜んでくださり、感謝してくださいました。次回もお茶に関する講座の希望が大半でした。

最後になりましたが、表千家様の心を暖まるご配慮に厚く御礼申し上げます。俗にいう道安団いです。この席味違った感じです。秋のお菓子をいた

## お茶の歴史

表千家 久田宗也宗匠



### 千家と水

小川通に面して表裏両千家が並び、下がつたところには武者小路千家があります。その理由は鴨川をはじめ堀川、小川など北から南へ流れる多くの川が、地上だけでなく地下にも豊富な水が流れています。その水を汲み上げてお茶の水として使われたのでしょう。

歴史学者の中村直勝博士は「水のいいところにお茶の家元が定まつた」といわれたが、さらに南へ下がつて西洞院正面の藪内家も同じ川筋に存在しているようです。

小川の家元の地所が、お茶の家と決まつたのは利休の晩年であって、息子の少庵が太閤秀吉から天正十八年にもらったものです。堺生まれの利休は、若い頃は京都とは関係が少なく、五十五歳ごろから京へ力を及ぼし始めました。まず少庵を京へ送り、信長の茶の前四百年はすべて利休に流れ込み、

手伝いをさせました。大徳寺の門前に屋敷を構えた少庵は不審菴を作ります。

利休には同一年の二人の息子がありました。少庵は後妻宗恩の連れ子、実子の道安とともに利休の跡継ができるほどの力を持っていました。お互の力を別のところで發揮させようとして、道安は堺や大坂で利休とともに茶の道につとめ、信長歿後は秀吉に仕えます。大坂城には八人の茶の師匠が秀吉に仕えており、利休も道安も今井宗久、津田宗及と堺三人衆といわれました。

利休がお茶の世界に残したもの

鎌倉の初めから利休まで四百年、利休の後四百年、この八百年の間、同じ歴史学者の中村直勝博士は「水のいいところにお茶の家元が定まつた」といわれたが、さらに南へ下がつて西洞院正面の藪内家も同じ川筋に存在しているようです。

鎌倉の初めから利休まで四百年、利休の後四百年、この八百年の間、同じ歴史学者の中村直勝博士は「水のいいところにお茶の家元が定まつた」といわれたが、さらに南へ下がつて西洞院正面の藪内家も同じ川筋に存在しているようです。

### 利休がお茶の世界に残したもの

鎌倉の初めから利休まで四百年、利休の後四百年、この八百年の間、同じ歴史学者の中村直勝博士は「水のいいところにお茶の家元が定まつた」といわれたが、さらに南へ下がつて西洞院正面の藪内家も同じ川筋に存在しているようです。

利休がお茶の世界に残したもの

鎌倉の初めから利休まで四百年、利休の後四百年、この八百年の間、同じ歴史学者の中村直勝博士は「水のいいところにお茶の家元が定まつた」といわれたが、さらに南へ下がつて西洞院正面の藪内家も同じ川筋に存在しているようです。

### 三千家の成立

利休歿後百五十年、表七代目如心斎、裏では一燈の時、両千家を名のり、官休庵を含めた三千家が整つたと石州流の書き物に、はつきり記されるされています。

利休はそれまでの武家の華美な料理を改めました。「料理は簡略がよろしい」ということで「一汁三菜」と決められました。一汁は味噌仕立のおつゆ、三菜の一例には向付（さしみ）、煮物（魚・鳥・椎茸）と野菜のすまし仕立、焼物（魚・柚餡・付け焼）などで、これが「正午の茶事」の料理なのです。

利休はそれまでの武家の華美な料理を改めました。「料理は簡略がよろしい」ということで「一汁三菜」と決められました。一汁は味噌仕立のおつゆ、三菜の一例には向付（さしみ）、煮物（魚・鳥・椎茸）と野菜のすまし仕立、焼物（魚・柚餡・付け焼）などで、これが「正午の茶事」の料理なのです。

利休のあと江戸時代を通して今日まで利休の流れは生きつづけています。

お茶に使われる道具の中に「利休型」といわれるものがあります。利休以前の古くからあったものを元のままとが、一部形を改めたものを茶に使えるものとして示されました。また「利休好み」といわれるものは、その時代に自分がよいとして、自分の意匠で決められたものです。お茶の道具については、千家十職と呼ばれる人たちに受けつがれ、基本の型に基いた道具が今も作られています。

利休のあと江戸時代を通して今日まで冬至の頃から立春までの冬の夜長を暖かくもてなす工夫が決められています。

「名残りの茶事」は秋の深まるころ、風炉の名残り、古いお茶に対する名残りをこめながら主客とともに行く秋を惜しむお茶事です。お茶の世界では「口切り」は正月であり、「名残り」は歳暮にあたります。

利休はそれまでの武家の華美な料理を改めました。「料理は簡略がよろしい」ということで「一汁三菜」と決められました。一汁は味噌仕立のおつゆ、三菜の一例には向付（さしみ）、煮物（魚・鳥・椎茸）と野菜のすまし仕立、焼物（魚・柚餡・付け焼）などで、これが「正午の茶事」の料理なのです。

利休はそれまでの武家の華美な料理を改めました。「料理は簡略がよろしい」ということで「一汁三菜」と決められました。一汁は味噌仕立のおつゆ、三菜の一例には向付（さしみ）、煮物（魚・鳥・椎茸）と野菜のすまし仕立、焼物（魚・柚餡・付け焼）などで、これが「正午の茶事」の料理なのです。

利休のあと江戸時代を通して今日まで冬至の頃から立春までの冬の夜長を暖かくもてなす工夫が決められています。

「名残りの茶事」は秋の深まるころ、風炉の名残り、古いお茶に対する名残りをこめながら主客とともに行く秋を惜しむお茶事です。お茶の世界では「口切り」は正月であり、「名残り」は歳暮にあたります。

利休はそれまでの武家の華美な料理を改めました。「料理は簡略がよろしい」ということで「一汁三菜」と決められました。一汁は味噌仕立のおつゆ、三菜の一例には向付（さしみ）、煮物（魚・鳥・椎茸）と野菜のすまし仕立、焼物（魚・柚餡・付け焼）などで、これが「正午の茶事」の料理なのです。

利休のあと江戸時代を通して今日まで冬至の頃から立春までの冬の夜長を暖かくもてなす工夫が決められています。

「名残りの茶事」は秋の深まるころ、風炉の名残り、古いお茶に対する名残りをこめながら主客とともに行く秋を惜しむお茶事です。お茶の世界では「口切り」は正月であり、「名残り」は歳暮にあたります。

# お茶とお菓子

和菓子研究家 鈴木宗康先生

## 和菓子の歴史

和菓子の始めは木の実や草の実（栗・柿・こんにゃく芋）など自然の風味を生かしたものでした。古代のお菓子には、ふのやき・ところ・さいこくまい・けんちん・うずらやき・こんび・つのまた・いかもち・すいか・すいせん・たばらこ・すいだ・あまざら・きんとん・みずぐり・いりごめ等、突拍子もないものがありました。「みずぐり」とは生の栗の皮をむいて水につけて甘みを出したもので、本来は毒消しの効果があるとして、青磁の小皿に一つ乗せて出したものです。

## 隋唐との交流が始まる

と唐菓子八種類、果餅十四種がはじつきました。

粉を練ったものの中に肉を入れた現在の餃子のようなものです。日本では肉を入れずさつと油で揚げて使いました。

これらは今も奈良の春日大社、京都の八坂・上賀茂・下鴨神社には神饌として残っています。一方、日本には神代から伝わる餅があつたので、これによつて餅菓子の原型ができました。京都の「かまもち」、奈良の「ひうちやき」等がそれです。

六角烏丸辺りに店を構え、塩瀬から嫁

織田信長の頃になると、キリスト教の宣教師によつてカステラ・ボーロ・有平糖・金米糖の南蛮菓子を持つて現在に至つています。

千利休の時代になつて、ある期間百回のお茶事をした時、七十回まで「ふのやき」が使われました。小麦粉をのばして山椒味噌を餡にした団子です。中国の飲茶には五種類ほどのぎょうざが出ますが、宮廷では百種類の包み方があつたところから、日本でもお茶事の客に応じて毎回変つた包み方をされたのではないかと思います。

鎖国になると日本の中いろいろ工夫されます。中でも羹は「あつもの」といつて三十六種類もきました。しんこ細工のようなもので、煮物椀にお汁をかけて食べました。中身が肉の餡から小豆に代り、蒸し羊羹になり、煉羊羹になりました。京の駿河屋が煉羊羹の創始者で、紅羊羹として売り出し、秀吉の北野大茶会ではこれが使われています。

饅頭は中国の僧侶についてきた渡来人が肉まんのようなものを作り「奈良饅頭」として売り出したのが始めです。その後、京へ出て饅頭屋「二」と名のり、

をもらい「塩瀬饅頭」を売り出しました。この町名を饅頭屋町と言います。京都は四季の変化がはつきりしていられる町です。世界に誇る美しい四季の景取り入れられました。紅は梅、薄紅は桜、黄は菜の花、濃い黄は稔り、紫はあやめ・鉄仙、薄紫は藤の花・紫陽花、緑は松、白は雪といった具合に美しい和菓子が作られました。加えて京の御所の歳時記、神社仏閣の年中行事、茶道三千家の行事等をもとにして、お公家さん、坊さん、お茶人たちが寄つては、ああでもないこうでもないと言いながら、だんだん良いものが作られて行き、明治になつて現代のようなお菓子ができました。

お茶とお菓子

お茶とお菓子は切つても切れない仲で、車の両輪のようなもので。

千利休時代の茶道は男子專科でしたから、茶室はサロン的存在で、四畳半書院造の茶室はお客様と亭主がうちとけて味わうタイミングを見計らつてお出します。お茶を習い出したのは、明治になつて茶道が教育課程に取り入れられてからです。

ために、席入りするとまず茶懐石が出来ます。一汁三菜の虫やしない程度のもので、三献をあけ、五感を賞味します。建仁寺の四つ頭の式には、椿の葉にこんにゃくを四角に切つたものをせて出し、昔の名残りを止めていきます。お菓子をいただいてから濃茶を服します。

亭主はお客様のために趣向を凝らし、お客様は今日の趣向はどこにあるのかなと探り合いながら一ときを楽しむのがお茶事です。時季、材料、料理法、器具、道具、部屋の飾りつけ、服装に至るまで配慮するのが亭主であり、亭主のもてなしを心から喜んで受けるのがお客様の礼儀です。一客の心になりて亭主せよ、亭主の心になりて客いたせ。――和菓子は生きています。亭主はそれを味わうタイミングを見計らつてお出しますので、遠慮せずにいただくのが礼儀です。山海の料理でも、熱いものは熱いうちに、冷たいものは冷たいうちに召し上がつてくれださい。



# 上京区民ふれあいまつり

## ふれあいひろば

第二回を迎えた「上京区民ふれあいまつり」は、上京区民ふれあい事業実行委員会の主催により、十月二十五日に上京中学校校庭を会場として上京区民五千名が参加して開かれました。上京区社会福祉協議会をはじめ区内の各種団体が、それぞれに趣向をこらした

イベントが繰り広げられ、世代を越えた交流が会場を盛り上げました。

午前十時。正親幼稚園のマーチング

バンドと、白峯神宮の小町踊という上京区内の子どもたちの演技によってスタート。押しかけた参加者の渦の中で、おまつり気分が沸き上がります。

ひるすぎには田辺朋之京都市長も会場に姿を見せ、学区対抗玉入れの始球を薬玉に投げ入れたり、障害者の作品

コーナーでマフラーを買うなど、市長と区民のふれあいの輪が大きく広がって行きました。

校庭に設けられた模擬店をはじめ、いろいろなコーナーでは、売り切れが続出、最後のお楽しみ抽せん会では、入場の番号によって次々と賞品が渡され、最後に自転車の当たったおかさんをもって、午後三時にすべての行事を終了しました。



夷川五色豆



豆 政

本店／〒604 京都市中京区夷川通堺町東

TEL.075(211)5211~3

三条店／〒604 京都市中京区三条通河原町東

TEL.075(255)0390

イタリアが好き!  
イタリア料理専門店

レストラン

フクムラ

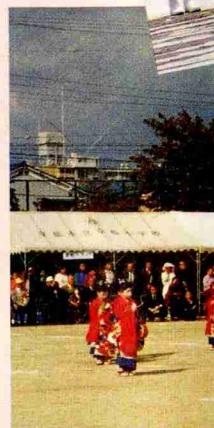
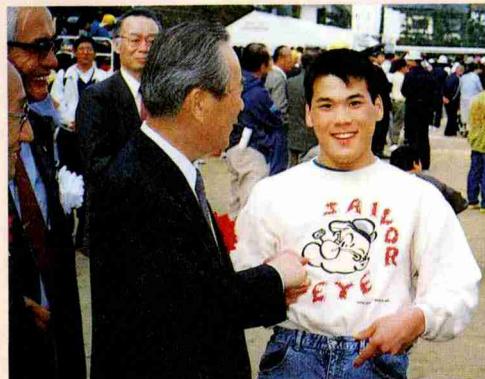
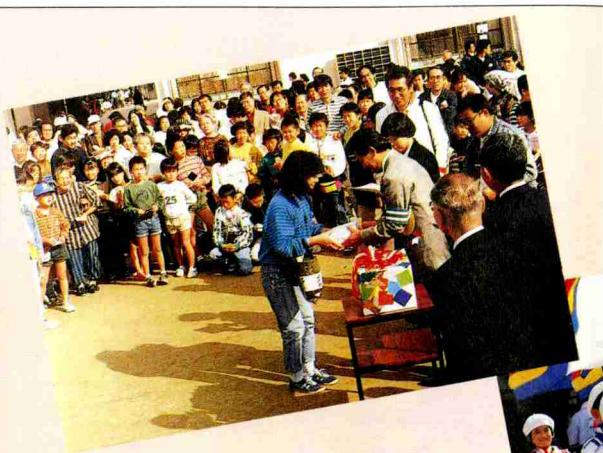
河原町店 中・六角河原町東入 255-5733(火・休)

四条店 中・富小路四条上ル 255-2060(水・休)

(株)イタシヨク(イタリアワイン・食品輸入元)(小売歓迎)

北・紫野大徳寺門前町 491-0900

第三回上京区民ふれあいまつりは、平成五年六月六日に上京中学校で行われます。



**ふれあい写真コンクール入賞者**  
ふれあいまつり賞「お婆ちゃんのふれ  
あい」平岡五男・上京区長賞「はるか  
ちゃん遊びましょう」西田実・文化振  
興会賞「鼓笛隊の旗手たち」山口容常・  
優秀賞「竹ぶえ」一井由清・「紙魚つ  
りの子供達」今井正隆・「らくがき」  
中野豊・「折り紙」小谷育子・「今日  
のよろこび」津田敦・佳作「まつりの  
谷間」蔭山陽介ほか九点



**NISSAN  
TERRANO**

新型ワイド  
テラノ誕生



**KN 京都日産自動車株式会社**

本社/京都市南区国道1号線十条上ル西側

お客様相談室 フリーダイヤル  
まごころライン 000120-11-5523  
コード/ニッサン

# 秋の区民茶会



裏千家の懸釜になる秋の上京区民茶会は、会場を裏千家の施設に移し、十一月二十三日に行われました。このお茶会は茶の湯を楽しんでいただくとともに、上京区の文化発展と地域振興を目的として毎年春秋二回開かれているものです。今回は裏千家研修会館を本席、茶道資料館のある裏千家センターを副席に、五百人もの来客が一碗の茶を喫しました。

会記（本席）	寄付床 東福寺前管長 林惠鏡貌下画
円相 喫茶去	鵬雲齋御家元筆一行 経霜楓葉記
床 白玉椿	鵬雲齋御家元好 紅葉木
花 入	鵬雲齋御家元箱
花 入	交趾竹節 永楽造
香合	鵬雲齋御家元好 銀杏 利齋作
風炉先	鵬雲齋御家元好
風炉先	渦紋 利齋作
棚 山雲棚	輪島宗芳作
水指 淡々斎箱	染付写 竹泉造
薄器	鵬雲齋御家元 在判共箱
茶杓	鵬雲齋作 銘豊かな心
茶盤	鵬雲齋御家元箱 黒 銘明光
茶杓	九代大桶長左衛門造
茶盤	替 染山焼 空権造
蓋置 菊	永寿造
建水	鵬雲齋御家元好
鳳來 净益作	
茶 京昔 辻利園詰	
菓子 薯蕷	光琳菊 鶴屋吉信製
器 赤絵	永楽造
菓盆 玄妙齋好在判共揃	
香狹間造	
火入 黒織部	光春作
火入 黒織部	香雲造

永年の信用と実績  
真心のこもったご奉仕

葬祭センター 京都

# 公益社

本社  
烏丸三条下ル (075)221-4116(代)

北 公 益 社 / 京都市北区紫明通堀川東入	☎ 075(431)7121(代)
中 公 益 社 / 京都市東山区五条通東大路東入	☎ 075(551)0042(代)
南 公 益 社 / 宇治市横島町(文教短大前)	☎ 0774(20)0042(代)
滋賀公益社 / 大津市朝日が丘一丁目	☎ 0775(23)0042(代)

# 上京クイズ

前回の正解は

## 大丸ヴィラの風見鳥

今回の問題はわかりにくかったかも知れません。そのため正解者も非常に少なかったようです。

これは烏丸丸太町上ルにある大丸ヴィラ（下村ハウス・中道軒）の屋上で風に吹かれている帆船形の風見鳥です。この建物は大丸百貨店主下村家の住宅として昭和五年に着工し、二年後に竣工したもので、イギリスのチュードル

王朝の様式によってヴォーリス建築事務所が設計した洋風住宅の代表作です。

ここには昭和初期の洋風家具六十六点が残され、歴史資料としてその建造物の評価を高める役割を果たしております。昭和五十九年、京都における近代洋風建造物の一つとして京都市登録文化財として登録されました。

敷地の南端は地下鉄丸太町駅の出入口となっていますが、堀のデザインに合わされています。御所の石垣の前から、じっくり御覧になつてください。

# これどこでしよう?

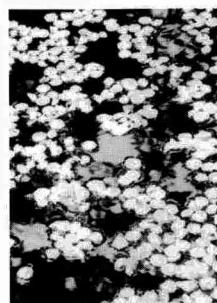
○正解の中から抽選にて二十名の方に記念品をお送りします。

○締切 平成五年四月十五日

○正解と住所・氏名・電話番号を記入の上  
〒601 京都市上京区今出川通室  
町西入 上京区役所地域振興室「上  
京・史蹟と文化」宛にハガキでお送  
り下さい。また本誌の読後感もお書  
き下さい。



## 編集後記



表紙の写真  
撮影者／浜岡 昇氏  
場所／京都御苑内  
出水広場

▼『上京 史蹟と文化』も第四号の発刊により二年目を終わりました。本号は、上京区民ふれあい事業を中心にして編集しました。そのため「町内よもやまばなし」と「思い出の西陣映画館」は休ませていただきました。

創刊以来の表紙写真の撮影者についてお尋ねがありました。この写真は上京区在住の写真家・浜岡昇氏にお願いしております。第三号の薪能の写真も同氏に撮影していただきました。

「上京 史蹟と文化」は、区内の文化や史蹟、学区の文化活動の紹介を通じて、文化とのふれあいの場づくりをはかることを目的として、上京区民ふれあい事業実行委員会と上京区役所が発行し、年二回、上京区全世帯に配布しております。

断ちきろう 身近な差別を 私から

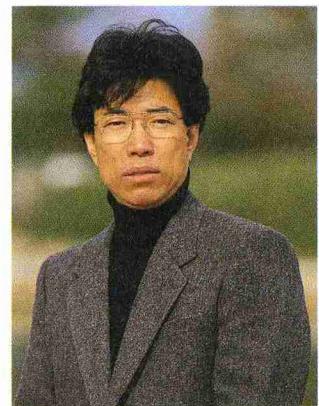
# —日本の行事 五節句 世界に翔く—



元宮内庁京都事務所長  
財団法人有職文化協会理事長 石川 忠

## (五節供)

人日の節句  
上巳の節句  
端午の節句  
七夕の節句  
重陽の節句  
三月三日  
五月五日  
七月七日  
九月九日



前京都国立博物館技官  
大手前女子大学文学部教授 切畠 健



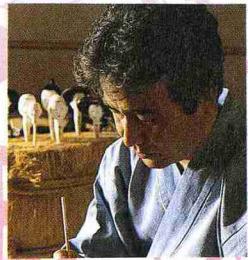
(御家紋付)

## 有職ひな人形



お子様の  
ご成長を願う――。

## 有職司



有職司 山本正明



六世 島津豊泉



有職司 井上 競

